

動物ワンダーランド——ヒト特集

清水義範

動物ワンダーランド

——
ヒト特集

清水義範

動物ワンダーランド——ヒト特集

著者／清水義範

＊

初版第1刷／1990年3月10日

初版第2刷／1990年4月5日

発行者／増田義和

発行所／株式会社実業之日本社

東京都中央区銀座1-3-9／振替東京1-326

郵便番号104 電話 03(562)2051〔編集〕 (535)4441〔販売〕

＊

印刷所／東京研文社

製本所／共文堂

＊

©YOSHINORI SHIMIZU, Printed in Japan 1990

落丁本、乱丁本は本社でお取りかえいたします。

ISBN4-408-53121-9

動物ワンダーランド——ヒト特集※目次

動物ワンダーランド——ヒト特集

表と裏

アネモネ化粧品・春のキャンペーン

創意工夫

講演『ステップ理論と日本の四季』

ひとり暮らし入門

鉄板社文庫・解説目録

ドラマチック・ファミリー

マーケティング天国

あとがき

215 195 159 143 123 97 77 49 27 5

カバ―装画／浅賀行雄
装幀／安彦勝博

動物ワンダーランド——ヒト特集

動物ワンダーランド
——
ヒト特集

I

CM 終って、司会のアナタ氏の上半身が映し出される。

「それではまず、今週の解答者からご紹介しましょう。まずはおなじみ、レギュラーのカンダタ氏」

カンダタ氏がにこやかに一礼する。

「そしてもう一人のレギュラーは、このところ絶好調のシバリちゃんよろしく願いまーす、という感じでシバリちゃんが頭を下げる。」

「そして次は、今日が六回目の出場になりますか、セミ・レギュラーのムサク氏」

「今日は全問題正解を狙ってますから」

「ほう。大変な意気込みですね。頑張ってください。そして今日、一人目のゲスト解答者はいつも可愛いルーナちゃんです」

「どうぞよろしく」

「どうですか、ルーナちゃんは、動物が好きですか」

「好きなんですけど、クイズとかは自信ないんです」

「そうですか。でも、とりあえず頑張ってみてください」

「はい」

「そしてもう一人のゲストは、おなじみスポーディ氏です」

「どうも」

「いかがですか、この手のクイズは」

「まるで自信ないですね。今日は恥をかくのを覚悟してやってきました」

「いやいや、そう言わないで、自信をもってやって下さい。易しい問題もありますから」

アナンダ氏は視聴者のほうを見るような顔をしてやや声を張って言った。

「という解答者をお迎えして、今日の『動物ワンダーランド』は、サルの仲間でも最も高等動物だと言われているヒトの特集をお送りします」

テーマ・ミュージック流れて司会者・解答者たちロングで映し出される。ミュージック終り、アナンダ氏のアップ。

「それではまず、この画像から見ていただきます」

画面が記録映像に変わる。

「はい。これがヒトですね。ヒトは一般に、このように後肢二本で立つて歩行します。体の色がまちなまですが、これは本当の体の上に衣服をつけているからです。衣服をつけるというのは、同じサルの仲間のゴリラやチンパンジーには見られないヒトの大きな特徴になっています」

ヒトが群れてぞろぞろと歩いていくシーンが映る。

「これは朝です。ヒトがぞろぞろと行列を作って歩いています、彼らの仕事場へ向かうところ

なんですね。ヒトというのは大変に社会的な動物で、大勢の仲間と共同体を作ってそこで仕事をするのが普通です。チンパンジーなどもムレを作って、そこで役割分担をして生活しますが、ヒトの作る社会のほうのはるかに大規模で複雑です。むしろほかの動物ではアリに似ていると言えるかもしれません。はい、出てきました。この、やけにいばっているのが共同体のボスです。おいこら。お前、もっと真面目に働かなくちやいかんぞ。はい、わかりました。というところでしょうか。子分のヒトがやたらベコベコしていますねえ」

見物者の席でくすくす笑う声が入る。

「さて、今度はヒトの巣のほうを見てみましょう。巣では、メスのヒトが子供を育てています。これが赤ちゃん。どんな動物でも、不思議に赤ちゃんというものは可愛いものですなえ。メスが赤ちゃんにおっぱいを飲ませています。ヒトというのは哺乳類ですから、卵ではなく赤ちゃんの形で子を産んで、お乳をやって育てるんですね。赤ちゃんは満足そうに寝てしまいました。ところで一般には、オスのほうが共同体で働き、メスのほうが巣にいて赤ちゃんを育てることが多いんですが、研究家の話によると必ずしもそう決っているわけでもなくて、中にはメスが働きに出て、子育てを他人にまかせてしまう場合もあるんだそうです。えーと、あ、これは夕方になったところですね。オスが仕事を終えて巣に帰ってきました。ただいま。お帰りなさい。というところでしょうか。こうして、この家族は餌を食べます。ヒトというのは雑食ですから、ほとんど何でも食べます。木の実や草の実、葉っぱ、それから他の動物の肉や卵も食べます。ただしトモ食

いはしません。平和に餌を食べて今日一日のことを話しあっているのかもしれませんが」

記録映像終り、アナンダ氏の上半身アップ。

「はい。まずはヒトの生活ぶりをざっと見ていただきました。そこで、最初の問題です」

アナンダ氏、ボードを手に持つ。

「ヒトは哺乳類ですから赤ちゃんにおっぱいをやって育てると言いましたね。それでは、メスのお乳は、体のどこに、何個ついているでしょうか。このボードにヒトの体が描いてありますから、絵に描いて答えて下さい」

「うわあ」

奇声を発したのはムサク氏だった。

「赤ちゃんにお乳やるとこ映ってましたねえ。見逃しちゃったなあ」

「注意深く見ていた人はわかるはずですね。さあ、描いて下さい。メスのお乳は体のどこに、何個あるでしょう」

2

最初の問題に正解したのは、カンダタ氏とルーナちゃんの二人だけだった。シバリちゃんも、胸に二個の乳房があるという点では正しかったのだが、その二個を縦に並べてしまつて誤りとさ

れたのだ。ムサク氏は両方の脇の下に各二個ずつと描いてバツ、スポーディ氏はお腹に一個、と答えてこれもバツだった。

メスが湯をあびている映像で正解が確認され、カンダタ氏とルーナちゃんの前には正解した証拠としてゾウのぬいぐるみが置かれた。

「ムサク氏は、全問正解を狙っていたわりには、早くも一問目でコケてしまいましたね」

「絵に描いて答えよ、という問題苦手なんです。そんな細かいところまで見てられないでしょう」

「そんなことないよねえ、ルーナちゃん。ちゃんと見て覚えてたものねえ」

「珍しい形だったから覚えてたんです」

「そうですか。それでは、ヒトについてももう少し見てみましょう」

ヒトの記録映像。

「まず、オスとメスの違いをもう少しよく見てみましょう。さっき見た通り、胸にお乳がふくらんでいるのがメスですね。それではオスの特徴は何か。見て下さい。取材班がオスの一匹をつかまえて裸にしてみました。逆さになっていますねえ。あ、嫌がっています。ごめんね。すぐ放してあげるからね。はい、見て下さい。後肢のつけ根のところに、突起状の生殖器がありますね。これがあるのがオスで、ないのがメスです。はい、放してあげるよ。おやおや、ぴゅーっと逃げていってしまいました」

見物者たち大いに笑う。

「さて今度はこれは、狩りをしているヒトの映像ですね。こうしてヒトは、海の魚類を獲って食べたりもするわけです。そしてこちらは、食べられる草を育てているヒトです。器用に道具を使いこなしているでしょう。この器用さで、ヒトは他のサルたちよりずっと優秀な文化を作りあげているんですね」

記録映像はそれから、ヒトの子供が学校というところへ行って教育を受けるところや、戦争というヒト同士の縄張り争いによる殺しあい、などを映し出した。

「はい。ヒトについてざっと見ていただきました。それではここで、一人に一間ずつ、ヒトについてのイエス・ノー・クイズです」

イエス・ノー・クイズのテーマ曲。

「ではまずスボーディ氏」

スボーディ氏の上半身。

「ヒトは眠る時、横たわって寝る。さて、イエスカノーか」

「うーん。イエス」

ピロロン。

「はい正解です。ご覧下さい。何かマットのようなものの上に横たわって寝ていますね」
その映像。

「じゃあルーナちゃん。いいですか」

「はい」

「ヒトは一夫一婦制である。さてこれは、イエスカノーか」

ルーナちゃん頭をかかえて考えた結果、

「イエス」

プー。

「残念でした。はい見て下さい。これは、最初に映った巢に奥さんと子供のあるオスです。さて、昼間こうして働いているわけですが、あれれ、巢には奥さんがいるというのに、仕事場の若いメスをこんなところへ誘い込みましたねえ。あれ、やおら相手の衣服を脱がせて交尾を始めました。これは鳥類などには考えられないことですね。ヒトは一夫一婦制ではないことがこれでおわかりでしょう」

残念そうなルーナちゃん。

「では次、ムサク氏ですよ」

「はい」

「動物の中には、自分の縄張りを表すためにマーキングということをしますが、知っていますか」

「知ってますよ。私は準レギュラーですよ。犬があちこちにおしっこしたりするやつでしょう」

「ほう。よく知ってましたね。それでは、ヒトもマーキングをする。さて、イエスカノーか」

「うーん。イエス、ノー、ときたからこは……、ノー」

ピロロン。

「正解です。例外もありますが、ヒトは自分の巣の中にフン溜め場を持っていてそこにフンをすることが多いんですね。縄張りを示すためにあちこちにまいて歩くことはあまりしません。学者の説によるとこれは、ヒトというのは目がよくて視覚にたよって生きている反面、嗅覚はあまり発達してなくて、自分のフンと他人のフンを嗅ぎ分けることができないんだそうです。だから、マーキングをすることもない、というわけです。よくわかりましたねえ」

「ヒトのことなら何でもきいて下さい」

「ははは。では次、シバリちゃん、いきますよ」

「はい」

「ヒトの寿命は、およそ八十年くらいである。イエスカノーか」

「八十年……。短いなあ。ノー」

「ブー」

「これは、およそ八十年くらいでよかったですね。中には百年以上生きるヒトもいますが、平均するとそのくらいです。八十年は短いといいましたが、それでもサルの仲間としては一番長いんですよ」

「そうなんですかあ」

「じゃあカンダタ氏。いいですか。ヒトの繁殖期、わかりますね、子供を作る時期です」

「ええ」

「その繁殖期は、春と秋、一年に二回である。さて、イエスカノーか」

カンダ氏は嬉しそうに大きくうなずいた。

「これは自信を持ってノーですね」

ピロン。

「さすがですねえ。知ってたんですか」

「大体想像つきますよ。ヒトはかなり高度な生活をしていますからねえ、いつ子供を産んでも育てられるんですよ」

「いやお見事。その通りです。ヒトにはあまり敵がないので、年中いつでも安心して子育てができるんですね。だから特別の繁殖期というものはなくて、まあ言ってみれば気が向けば年中交尾している、というわけです。カンダ氏、お見事でした」

拍手があつて、満足そうな顔をするカンダ氏の顔のアップ。そしてCMになる。

3

CM終つて、アナンダ氏が映る。

「さて、今日の『動物ワンダーランド』はヒト特集をお送りしているわけですが、この辺で、さつきもちよつと話の出ていましたヒトの繁殖活動を見てみることにしましょう。取材班が大変素晴らしい記録を撮影してくれたようですよ」